
あの一球

聖闘士

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの一球

【Nコード】

N6080K

【作者名】

聖闘士

【あらすじ】

就職を間近に控えた俺。ふとテレビを見ると、見知った顔が映っている。そうして俺は思い出す。あのアツかった、夏のグラウンドを――

前篇（前書き）

野球のルールや用語を知らないと、少々戸惑うかも知れません。分からない用語がありましたら、感想などで教えていただけると出来る限り答えるようにします。

*ちなみに、主人公達周旋高校野球部のオーダーは以下のようになっています。

一番	センター	矢部つち
二番	セカンド	勇樹
三番	キャッチャー	正晴
四番	レフト	隆之
五番	サード	シオ
六番	ファースト	コバ
七番	ライト	マーシー
八番	ピッチャー	正樹（主人公）
九番	ショート	ナベシン
二番手ピッチャー	ウッチー	
サードコーチャー	ミヤ	

前篇

バイトの帰り道でコンビニに寄り、夕食——いや、今の時間ではもう夜食か——を買ってアパートに帰る。アパートに帰ったら、テレビ番組を見つつコンビニ弁当を食べる。このところ、毎日毎日この繰り返しだ。

俺の名前は片山 正樹。東京にある武流大学の4年生である。

冒頭にバイト帰りと書いたが、俺は別にフリーター志望というわけではなく、4月から東京の企業に入社することが決定している。今はもう卒業試験も終わり、あとは卒業を待つだけの気楽な生活なのである。この時期の大学生と言えば、最後の学生生活を満喫しようと、あちこちに卒業旅行へと向かうのが常であるが、俺もまたご多分にもれず、2月中は大学の友人たちと一緒にイギリスで二週間ほど遊びまわった。

しかし俺の友人たちは地元の企業へ就職が決定している者がほとんどなので、3月になると友人たちは東京のアパートを引き払って地元へと帰ってしまい、東京の今とは別なアパートで独り暮らしを続ける俺だけが、一人さびしく取り残された・・・という次第だ。別のアパートへの引っ越しは3月の終わりごろなので、それまでの約一ヶ月間、遊ぶ相手もおらず、バイトぐらいしかすることがないのだ。

最近では冒頭で述べた通りに、家とバイト先とを往復するだけの単調な生活となってしまうている。

『世の中なんてこんなものさ』と嘯うなづいてみても、やはり少々さびしい・・・

そんな中、テレビのスポーツニュースで見知った顔を見つけた。

———今、画面いっぱいアナウンサーのインタビューを受けている『高木博』。

先日のドラフトでベ이스ターズから1位指名を受け、来年から晴れてプロ野球選手となる、俺と同年の大型新人だ。高木は現在、那覇で行われている横浜ベイスターズのキャンプで、プロの選手と一緒に汗を流しているらしい。高校時代からプロに注目されていた高木は、すでにマスコミから注目される選手の一人となっている。

俺はインタビューに答える高木の姿を見て、懐かしさを覚えると同時に、ちょっとした悔しさを感じた。向こうはテレビに映るような有名人。それに引き換え、俺は・・・

見知った顔といっても、俺と高木は友人と言うわけではない。い

や、高木の方では、俺の顔など覚えてもいないだろう。

——俺達が直接顔を合わせたのは一度きり。そう・・・あの高三の夏、アツい日差しの降り注ぐグラウンドの上、ただ一度きりだけなのだから——

「——おい正樹っ、聞いてんのかっ！」

「ああ、悪い。少しぼうつとしていたみたいだ」

「——ったく・・・しっかりしてくれよエース！！今日は大事な試合なんだぜっ！」

「悪かったって、正晴・・・大事な試合だったことは俺だって良く知ってるよ」

そう、正晴に言われるまでもなく知っている。

今日は夏の神奈川県大会4回戦。我らが周旋^{しゅうせん}高校史上初の、ベスト16がかかった大切な試合なのだ。忘れられるハズがない。今日の試合に勝つ事が、この一年間の目標だったと言っても過言ではない。

副キャプテンである正晴は、その事についてチームで一番こだわっていると言っても過言ではない。こつちを睨みつける目は、寝不足気味なのか少々赤い上に、確実に、いつもよりもテンションが上がっている。

・・・このままでは気合いが空回りしすぎて、試合で大失敗しそうだ。

俺が正晴を落ち着かせようとすると

「落ち着け、正晴。気合いを入れるのは良いが、入れすぎても逆効果だ——お前だって良く分かっているだろう？」

そんな声が背後からかけられた。この洪くて周りの人間を落ち着かせる声の持ち主はキャプテンの直也だ。正晴は直也の方へ向き直ると、バツの悪そうな表情を見せて謝った。

「悪い・・・ちょっと興奮しすぎたみたいだ」

「そうか。それなら良かった」

そう言うと、直也はスタンドの方へゆっくりと歩き出した。

正晴・・・いや、周旋高校野球部の面々が直也の言うことに対して一目以上置くのには理由がある。直也は一年の夏の大会から、今年の春の大会までレギュラーの一塁手だった。どんな球でも後ろに逸らさない好守備とチャンスに強い打撃で、チームの中心選手だったのだ。

——しかし今年の5月、最後の夏の大会に向けての無理な自主練により、直也は右脚の付け根の関節を痛めてしまい、全治3カ月と医者に診断された。その後はケガを治しつつリハビリに専念し、何とか7月の初めには代打として、一打席だけだが試合に出場することが出来た。

・・・しかし結局、直也は夏の大会には間に合わなかった。

7月初めに行われた、夏の大会のベンチ入りメンバー発表、直也はレギュラーメンバーはおろか、ベンチ入りメンバーからも外れた。初めてのレギュラー落ち——それも高校時代最後の大会なのだ——それを知らされた時の直也は、少なくとも表面上はいたって普通に見えた。だが発表が終わり、ゆっくりと歩き去って行った直也の後ろ姿を、俺達チームメイトは一生忘れないだろう。

それでも、直也は腐ったりはしなかった。ベンチ入りメンバー発

表の後、毎朝誰よりも早く練習に来て、グラウンドを整備する。練習が終わった後も、次の日の練習メニューを考えるために、監督と遅くまで打ち合わせをしているのを、何度も見た。今日だって、俺達ベンチ入りメンバーがウォーミングアップをしている間に、直也は俺達が使うバットやヘルメットをきっちり磨いておいてくれた。

そんなことを思いながら正晴の方を向くと、ちょうど正晴とバッチリ目が合ってしまった。おそらく同じことを考えていたのだろう。正晴はニヤツと笑うと

「気持ちはおなじみたいだな——直也のためにも、気合入れてこうぜっ！」

と言って、俺の背中を叩いてきた。俺はそれを『痛いなあ』と思いつつも

「そうだな」

という返事を返していた。

——いよいよ俺達の前の試合も終わり、グラウンドに入場する時間だ。直也やベンチ入り出来なかった後輩達に見送られ、俺達は

選手専用の入り口からベンチに入った。俺が自分のカバンからスパイクやグローブを取り出していると、正晴が

「——おい正樹、見てみるよ。敵さんのお出ましだぜ」

と言って、相手ベンチを睨みつけていた。俺もその視線の先へと目を移すと・・・

その先に居たのは、強豪にして、今日の俺達の大戦校でもある御み代よすく鋤高校のメンバーだった。中でも、ひと際視線が集まってしまうのは、今大会ナンバーワンバッターと呼ばれている『高木 博』だ。

既にこの大会で三本ホームランを打っており、波に乗った状態で、この試合に臨んでいると言えよう。同じグラウンドに立っただけで、なんだか圧倒された感じがする。

「——勝てるかなあ、俺たち」

そんな弱気な発言を漏らしたのは、セカンドの勇樹だ。試合では華麗なプレイを見せるものの、普段の生活ではそこまで前へ出るタイプではない。今の発言も、俺たちに聞かせるつもりはなかったのだろう。勇樹自身が一番、自分の言ったことに驚いているようだ。しかし、言った内容は誰しもが多少は思っていることである。辺り一面に重苦しい空気が立ち込める。

「勝てるさ。いくら凄えって言っても俺達と同じ高校生だぜ？何とかなるな」

そんな楽天的な意見で重苦しい空気を吹き飛ばしたのは、レフトを守り、チームの四番もつとめる隆之だ。隆之はその大柄な体になさわしく、大らかな性格をしており、その前向きさはチームの重苦しい空気をいつも吹き飛ばしてくれた。隆弘の気持ち良い笑顔を見ると、いつも何とかなりそうな気がするから不思議だ。

隆之は俺の方にいつもの笑顔を向けると

「だからそんな怖い顔すんなよ、正樹、正晴」

と言って、俺達の気持ちを楽にしてくれた。そうだ、俺達にはこんなに頼れるチームメイトが居るんじゃないか。

——よし、気合は十分に入った。後は、全力を尽くすのみだ

いよいよ試合開始だ。監督のいつもの訓示の後、俺達は一列になつて、主審が集合の合図をかけるのを待った。

「集合っ！」

主審の合図に従い、俺達と御代鋤高校の連中がホームベースの前で睨みあう。俺はちょうど真正面に來た高木の顔を、精一杯睨みつけてやった。

「これより、周旋高校と御代鋤高校の試合を始めます。

——礼っ！！！」

「「「お願いしますっっっ」」」

先攻は御代鋤高校である。俺達ナインは、各自自分のポジションに散って行つた。俺の前にいるのは正晴のみ。ゆっくりと深呼吸をする。

・・・一点を争うことになるかも知れないこの試合、先頭バッター

は大事に行かなければならない。

じっくりとマウンドの感触を確かめながら、一球一級しつかり投球練習をしていく。正晴のミットが小気味の良い音をたてる。ブルペンでも感じたことだが、やはり俺の今日の調子は悪くない。慎重に攻めれば、そこまで大量失点はしないだろう。

先頭バッターが打席に入り、いよいよプレーボールだ。サイレンの鳴る音を聞きながら、俺はバッターの胸元目掛けてストレートを投げ込んだ。

——ストライク

一回の表の相手高校の攻撃は、先頭バッターがピッチャーゴロ、次のバッターが空振りの三振、最後のバッターがセンターフライという三者凡退に抑えることが出来た。四番の高木まで回さずに済み、上々の立ち上がりと言えるだろう。そう思っていたら、いきなり背中に衝撃を感じた。

「ナイスピッチング！今日、調子良いじゃねえかつ」

正晴だった。相変わらず、手加減を知らない奴だ。

「さあ、次は俺達の攻撃だ。しっかり食らいついて行けよっ！」

正晴がその声をかけたのは、ネクストバッターズサークルで素振り中の勇樹だ。確かに、さっきのことを考えると、勇樹が相手に吞まれていても不思議ではない。打席が多く回る二番という打順を考えると、勇樹には早く相手に対しての苦手意識をなくしてもらわなくては。

しかし、振り返った勇樹の表情を見た俺と正晴は、良い意味で裏切られることとなった。

——そこには、いつも通り試合に集中する勇樹の真剣な表情があり、確かに俺たちに向けて頷いてみせたのだ。

一回の裏の俺達の攻撃は、先頭の矢部っちがファーストフライで倒れ、二番の勇樹に打順が回った。初球は外角に外れるボール球、二球目は低目を狙ったストレートが外れ、これでノー스트ライクツーボールとなった。

そして三球目、相手ピッチャーがカウントを取りに来た内角高めのストレートを、勇樹はセンター前に弾き返した。

「ナイバッチ、勇樹っ！！！」

俺達が大声で褒め称える中、勇樹はファーストベース上で小さく微笑んだように見えた。

次のバッターは正晴。初球が高目に外れ、二球目が内角に決まり

カウントは1 - 1、ここで出た監督からのサインは送りバント。少ないチャンスを確実にモノにしようという考えなのだろう。

・・・正晴と早朝のグラウンドで行ったバント練習を思い出す。二年の秋の大会でバントに失敗した正晴に、どうしてもやりたいからと誘われ、10月終盤から二週間、朝の六時からピッチングマシンをセットし、ひたすら二人で交互にバントし続けたのだ。地味な練習だが、その練習の結果、正晴も俺も、バントの成功率は飛躍的に上昇した。

正晴は見事にバントを決め、これでツーアウト、ランナー二塁。次のバッターは四番の隆之。スタンドからの声援が一層激しくなる。こういう風に周囲が盛り上がっている時にこそ、隆之はやってくれる男だ。俺も一生懸命、応援しなければ。

初球はカーブが内側に外れてワンボール。相手ピッチャーは顔には出さないものの、恐らく内心凄く動揺しているはずだ。これは期待できるかも――

「おい、正樹」

「なんだ？今良いところじゃないか、正晴」

「バカ！キャッチボールだ」

言われて気付いた。もうツーアウトなので、次の回の守りに備えて肩を温めておかなければいけない。

・・・どうやら、のめりこみ過ぎていたらしい。

『しっかりしろ、ピッチャーが冷静さを失ったら終わりだ』

「スマン、正晴」

俺はそう言って、ベンチから出て正晴とキャッチボールを始めた。もちろん、ピッチャーが投げるときは、隆之の打席に集中を戻す。

そしてワンスリーからの三球目、甘く入ったストレートを隆之が豪快に振りぬき、センターとレフトの間を抜けた。勇樹がホームへと帰ってくる。打った隆之は二塁を回ったところでストップした。

——先に一点をもぎ取った

スタンドで大歓声が沸き起こる。ベンチへと帰ってきた勇樹は、チームのみんなとハイタッチと交わしている。俺は正晴と顔を見合わせると、そろって勇樹の下へと急いだ。

「ナイバッティンッ！」

俺達が勇樹に声をかけると、勇樹ははにかんだ笑顔を浮かべた。

五番のシオがサードゴロに終わり、結局あの一点で一回の裏は終了した。元気よく各ポジションに散らばるみんなの背中を見ながら、俺は次のバッターのことに集中していた。

『先制点を取って、流れは今うちに傾いている。ここで高木を抑えることが出来れば、うちが有利に試合を進めることが出来るはずだ』

正晴も同じ気持ちだろう。この回の目標は一つ、高木を抑えて試合の流れをうちに確定させることだ。

その高木がバッターボックスに入る、風格が漂っている気がするが、気のせいに違いない。隆之の言う通り、こいつだって俺達と同じ高校生なのだから。

初球は内角を攻める・・・つもりだったが、逆の外角へと行ってしまった。ヒヤリとしたが、高木がバットを振らず、何とかストライクゾーンへと決まったので、ホッと胸をなでおろす。しかし、次のカーブはとんでもないところへ行ってしまった。正晴が飛びつくが、そのミットの先をボールは通り過ぎていく。

———どうやら、肩に力が入っているらしい

俺は正晴のジェスチャーに従って腕を回し、再び深呼吸をした。いくらかは冷静になれたようだ。次の一球は、狙い通り外角に構えられた正晴のミットへと吸い込まれていきそうになった。

——カキン

高木のバットが振られると同時に、ボールはレフトの隆之の頭上を越えていく。センターの矢部っちがカバーに回るが、高木はゆうゆうと二塁まで進んでしまった。

『甘かった』

コースではなく、俺達の考えが。高木を綺麗に打ち取るのは、俺達の予想よりもずっと難しいことだったのだ。ホームを見ると、まだ二回の表だというのに、正晴がタイムをかけてマウンドへと向かって来ていた。内野手全員がマウンドに集合する。正晴が真剣な表情で俺たちに語りかける。

「打たれたのは、しょうがねえ。こうなったら、後の奴らを打ち取って何とか無失点、最悪でも一失点に抑えるぞ」

勇樹も俺に向かい

「切り替えていこうね、正樹」

と声をかけてくれた。

『よし、切り替えよう』

そう決心し、再び定位置へと戻った正晴の方へと向き直る。次のバッターも高木ほどではないが、要注意な打者には違いない。慎重に攻めなければ。

初球は外角へのカーブを投げる。狙っていたのだらう、相手バッターの体はスイングの体制に入るが、ボール球のため、そのスイングは途中で止まることとなる。これでワンボール。

次の球は同じコースへとシュート。実際はさっきよりも内側へと入ってしまったが、それが功を奏したのか、相手の打球は詰まったサードゴロとなった。サードからファーストへとボールが送られるが、高木は次の塁へは進塁出来ない。

次の六番バッターは左だ。右ピッチャーの俺には、依然として要注意なことには変わらない。今度はストレートを内角へと投げ込むコースがそれで、ワンボール。

次の球もインコースだったが、低すぎて再びボール。

ツーボールとなったが、ここで甘い球を投げては、それこそバッターの思う壺だらう。正晴はここであえて、外角のシュートを要求してきた。俺は正晴の期待に応えるため、正晴のミットめかけ、渾身の一球を投げ込んだ。

『完璧だった』

と自画自賛したいくらいの俺のベストピッチは、外角ギリギリに決まり、それをバッターが見逃してようやくワンストライク。次の投球は外寄りのボール球を、先ほどのイメージが抜けていなかった相手が空振りしてツーストライク。そして、最後は内角へのカーブが再び絶妙なところへ決まり、見逃し三振に斬って取ることが出来た。

『ようやくツーアウトだ』

自分では油断したつもりはなかったのだが、自分の予想以上に決まったピッチングにより、緊張の糸が幾分緩んでいたのだろう。次のバッターへの初球、内角へ向かうはずだったボールはド真ん中へと向かっていた。

——キーン

地を這うような打球が一二塁間へと飛んでいく。ツーアウトなので、二塁ランナーの高木はスタートをきっているだろう。この打球が抜ければ、一点は確実だ。

俺があきらめそうになった時、打球に勇樹が飛びつくのが見えた。

——パシッ

勇樹のグローブの先っぽギリギリにボールが納まっているのを確認した瞬間、俺は思わず叫んでいた。

「ナイスプレー、セカンッ！」

中編

ベンチに帰る途中でも、勇樹はみんなから手荒い祝福を受けていた。俺自身もその輪の中に加わり、勇樹の背中を思い切りたたく。

「サンキュー勇樹っ！お前のおかげで助かったぜ」

「いや、捕れたのはたまたま運が良かったただだよ」

それを聞いた隆之は、勇樹の首に手をまわして

「くっそ、大物ぶりやがってっ！そういう奴はこうしてやる」

そのまま勇樹の首を締めだした。勇樹は慌てて

「ちよっ！？ストップッ！ストップッ！正樹も笑ってないで助けてよっ！！！」

と、こちらに助けを求め出した。それを見かねた正晴が

「おいおい、お前ら・・・まだ二回の表が終わったばかりなんだぜ？今からはしゃいでどーすんだよ？はしゃぐんなら、この試合に勝つてからだろうが？」

そう言って、みんなの気持ちを切り替えさせた。

『こついつところはやっぱり副キャプテンなんだなあ』

と失礼なことを考えていると、正晴が小声で

「――完璧に打たれたな」

と言ってきた。その声の真剣さに俺も真剣に返す。

「ああ・・・次からは歩かせるぐらいの気持ちで攻めるか？」

「それよりも、アイツの前にライナーをためないのが優先だな。
・
・まあ、どっちにしろお前の負担は大きいんだけどな。しっかり
頼むぜエースッ！」

「そつちこそ・・・しっかりリード頼むぜ！」

そう言って、俺達は笑い合った。

その後は俺達も相手も決定打を欠いた。

相手のエース（右投げスリークォーターの本格派）が調子を上げ、俺達のチームは得点はおろか、ヒットを打つことすらままならない。二回の裏は六番のコバが見逃しの三振、七番のマーシーがショートフライ、八番の俺がセカンドゴロの三者凡退。

三回の裏は、先頭のナベシンがレフト前へポテンヒットを打つものの、続く矢部っちがバント失敗でワンアウト一塁。勇樹も外角のスライダーを引っかけさせられてセカンドゴロゲッツーとなり無得点だった。

四回の裏は、先頭の正晴がセンターライナー、続く隆之もセカンドフライで早々とツーアウトとなったが、五番のシオがサードのエラーで出塁し、六番のコバも四球で出塁。久々の得点チャンスかと思われたが、マーシーが空振り三振で無得点に終わった。

一方、相手高校の攻撃はさすがに厳しいものがあつた。

三回の表は先頭の八番をファーストゴロで打ち取ったものの、次の九番バッターにはライト前に打たれ、一番にはセーフティ気味の送りバントを決められた。二番には四球を与えたものの、三番バッターをレフトライナーに打ち取り、何とか高木に回さずに済んだ。

四回の表、先頭の高木は俺の投げたボール気味の内角シュートを苦もなく打ち返し、三塁線を破るツーベースとなった。勇樹はマウンドまで駆け寄りたそうに見えたが、俺と正晴にとつてはある程度想定内の範囲内のことだったので、勇樹には手で『なんでもない』と合図を送り、マウンドには集まらなかった。続く五番打者には送りバントを決められ、ワンアウトランナー一塁。しかし六番はレフトへの大きなフライに打ち取りツーアウト。その際に高木がタッチアップでホームを狙ったが、隆之の強肩がうなり、ホームでタッチアウトにすることが出来た。五回の表、この回は七番からの下位打線ながら、先頭バッターに死球を与えてしまい一転ピンチとなった。続くバッターはセオリー通り送りバント、先ほどヒットを打たれている九番へと打順が回ったが、何とかライトフライに抑えることが出来た。その間に二塁ランナーが三塁へと進み、次に迎えた一番バッターを再びの勇樹のファインプレーでアウトにすることが出来た。

そして試合は1 - 0で俺達のチームが優勢なまま、何とか五回の裏を迎えた。

「——ストライクッ！バッターアウトッ！」

主審の無情なコールが宣告される。俺が見逃し三振したことで、スコアボードに早くもワンナウト目が記された。

「おしかったね」

そう言ってくれるのは勇樹で

「ドンマイ、正樹。点を取るのは、俺たちに任せな！」

これは隆之だ。

俺がベンチで一息ついていると、後ろから正晴が

「ばてたか？」

と聞いてくる。

「いや・・・まだまだ大丈夫さ」

俺がそう強がりと言うと、正晴はニヤツと笑いながら

「それだけ強がり可言えれば大丈夫だな。後半戦もしっかり頼むぜっ！」

そう言つて、俺の背中をバチーンと音がるほど強く叩いた――
――正直とても痛い。

ナベシンがファーストゴロ、矢部っちがショートライナーでこの回が終了し、グラウンド整備のため、試合は長めの小休止に入る。その間にアンダーシャツを着替えた俺は、正晴が待つグラウンドへとゆつくりと足を進めた。スタンドの方を見ると、直也が応援に来てくれた方々に冷たい飲み物を配っている姿があつた。

そして次の瞬間、全くの偶然に直也と俺の視線がぶつかり、俺の視線に気づいた直也は大きく口を動かした。

『ガンバレ』

声は聞こえなかったが、言葉はしっかりと胸に届いた。

――さあ、後半戦だ

六回の表の相手高校の攻撃、この回は一番からなので三者凡退に打ち取らない限り、高木まで打順が回る。しっかりと抑えていかなくては。

先頭バッターの胸元へストレートを投げ込む。バッターは投球に入ると同時にバントの構えをし、俺の投げたストレートを一塁線へと転がした。

『セーフティバント』

完全に意表を突かれた俺は、ボールを拾うもののバッターランナーはすでに一塁ベースをかけぬけようとしており、どこへも投げられずに終わった。相手は足の速い一番バッターなのだ、予想してしかるべきだった。

・・・いや、反省は試合が終わってからすればいい。今考えるべきなのは、この場面をどうやって抑えるべきか、だけだ。ノーアウトランナー一塁、打順は器用な二番。さて、相手はどうやって攻めてくるのか。

『——盗塁か？』

——バントか？

——ヒットエンドランか？』

セツトポジションに構えたまま、俺と正晴は無言でアイコンタクトを交わす。次の瞬間、俺は一塁へと牽制球を投げ込んだ。一塁ランナーが一塁ベースへと素早く戻るのを確認した正晴は、俺へとサインを送る。正晴が構えたコースは、外側の相手のバットに届かない位置。球種はストレート。

『まずは一球外して様子を見る、ということか』

俺は内心でつぶやき、正晴の構えたミットへとストレートを投げ込んだ。

「走ったっ！」

ファーストのコバが叫ぶ。その瞬間、俺は正晴の送球の邪魔にならないようにマウンドでしゃがみこんだ。相手バッターの援護の空振り、それを気にした様子もなく正晴はボールを捕ると、流れるような動作で二塁へと送球を放つ。

「セーラーフツ」

二塁塁審の無情な掛け声。正晴の唇が『チキシヨウ』と動いたのが見えたが、今の正晴の送球でも刺せないのならばランナーの足を褒めるしかない。バッターの方へ視線を移すと、こちらはしっかりと送りバントの構え。相手チームの作戦としては、ここは確実にランナーを進めてくるようだ。こちらとしてはそれは何とか避けたい。出来ればバントは失敗して欲しいのだが・・・

——コッソッ

こちらの思う通りにはいかずに、相手バッターは外角高めのストレートをきつちりと三塁線へ転がしてきた。俺はそのボールを拾いあげると

「ファーストッ！」

という正晴の声に従い、ファーストへと送った。

「アウトッ！」

これでワンアウトはとることが出来た。しかしランナーは三塁に
いる上に、次は三番からのクリーンナップ・・・確実に高木へと打
順が回る。自分たちのブルペンを見ると、一つ年下の二番手ピッチ
ャーであるウッチーが投球練習をし始めたのが見えた。

『ここが正念場だな』

肩に力が入るのが分かる。しかしそんな時だった。

「正樹っ、気楽にいけ、気楽にっ！俺のところへ打たせれば、ま
たアウトにしてやるぜっ！」

・・・まったく、隆之はいつも気楽だな。でも、今の一言で気持
ちが大分楽になったのも事実だ。正晴の方を見ると、苦笑しつつも
どこかすっきりとした表情をしている。

『俺は自分に出来ることをやるだけだ』

三番バッターを攻める初球に正晴が要求したのは、内角へのストリート。しかし実際にボールが収まったのは外角、それもボール球だった。自分の狙ったコースには投げられなかったが、落ち込みはしない。俺のコントロールは所詮この程度——でも、相手を抑えるために全力を尽くすのみだ。次に要求されたのは外角へのカーブ。俺はコントロールを気にするよりも、腕を振りぬくことを意識してボールを投げ込んだ。

——キンツ

相手バッターが思い切り良くバットを振りぬき、打球は三遊間へと飛ぶ。ランナーはスタートせずに、打球の行方を見守る構えだ。この打球が抜けていれば一点だったが、何とかショートのナベシンが打球に追いついた。しかしボールを捕るのが精いっぱい自身で体勢を立て直せず、どこにも投げられない。

バッターボックスへ高木が入る。ここで正晴が二度目のタイムを取り、マウンドへと駆け寄る。勇樹達内野陣もマウンドへ集まり、互いの表情を見交わす。

「点はやらずにすんだが、ランナーが一塁三塁。しかも次は四番の高木だ。おまけにアウトカウントはまだ一つ・・・結構ピンチだぜ」

表情が多少こわばっているのを自覚しながら、そう切り出してみ

る。

「バカツ高木にビビってんじゃねえよ！気持ちで負けたらそれまでじゃねえか！」

「いや、弱気になっているつもりはないし高木にビビっているわけでもないんだけど・・・冷静に判断して、今の状況で高木を抑えるのは難しいと思うんだ」

「確かに・・・正樹はさっきバント攻撃で走らされたからね。ちよつと制球が乱れてるみたいだ」

俺の発言に勇樹が同意してくれて助かった。正晴もすぐに俺の言いたいことを理解してくれたようで

「敬遠する気か？」

と返してきた。

「ああ」

「・・・分かった。ただし、次の五番六番は絶対押さえるぞ。最悪でもこの回は一点でしのぐっ！」

「「「「「おうつ！」「」「」」」」」

正晴の声に、俺達の声が被さる。そして、みんなはそれぞれの守備位置へと戻って行った。

正晴が定位置に戻り、審判が試合を再開させた。そして先ほどの打ち合わせ通り正晴は敬遠のために立ち上がり、俺はそのミット目がけて四回ボールを投げ込んだ。

そして迎えた五番バッター。正晴はその初球、内角へとミットを構える。俺は微塵も動じることなく、そこへ目がけてボールを投げ込んだ・・・つもりだったが、ボールはストライクゾーンよりも上へとそれてしまった。気をとりなおして、先ほどと同じ内角を狙ったものの、今度は低すぎて正晴のミットに収まる前に、ワンバウンドしてしまった。

「ピッチャー、楽に楽に」

セカンドから勇樹が声をかけてくれているのが分かる。

『大丈夫、落ち着け』

次に要求されたのは外角へのカーブ。コントロールに気を使って投げた球——それは結果的に、スピードもコースも打ちごろのボールとなり、相手のバットの餌食となった。

——カキインッ

ボールは勇樹の頭上を越え、センターの矢部っちの方へと飛んでいく。飛距離はあるが、矢部っちの頭上を越えるほどではない・・・しかし、犠牲フライには十分な飛距離だ。矢部っちはボールを捕った後すぐに中継の勇樹へと送球する。勇樹も素早い連携をみせたが、もともとの打球の飛距離が遠すぎたため、ゆうゆうを三塁ランナーはホームへ帰ってきてしまった。

御代鋤高校の校歌が演奏されるのを聞きながら、マウンドの感触を確かめ直す。そうしていると

「ドンマイドンマイッ！ツーアウトツーアウトッ！」

隆之が大声を張り上げた。

「ツーアウトでランナーが二塁にいるからなっ！外野バックホーム体勢だぞっ！」

正晴も大声で指示を飛ばす。そうだ、ここまでは何とか予定通りの後のバッターを抑えて、次の回の味方の攻撃に期待すればいい。もっとも、油断は出来ない。二回の表では、それで一点を失いそうになっっているのだから。

次の六番バッターが左打席へと入った。初球は外角へのストリート。やはりコントロールが落ちているのを実感する。ボールは高目へと外れ、これでワンボール。次に要求されたのも全く同じコース。今回もやはり高めに浮いたものの、何とかストライクが入りワンストライクワンボール。三球目、正晴の構えたコースは真ん中やや外側へのシュート。左バッターの相手にとっては、外へと逃げていく球になる。ボールが先行しているが、腕を振りぬくことは忘れないようにし、正晴のミットめがけてボールを投げ込む。

相手バッターはその球を待っていたかのように足を踏み込み、コ

ースに逆らわずにボールを打ち返した。

—— ツッインツッ

再び三遊間へと打球が飛ぶ。しかし今回の打球は、さっきの打球よりもずっと速い。シオが打球へと飛びつくが、それをあざ笑うかのように打球はグローブの先を駆け抜けていく。

二塁ランナーは、三塁ベースを回ってホームへと突っ込んでくる。

「バックホー——ムツ——!!」

正晴が全力で叫ぶ。その叫びに応えたのは、隆之のレーザービームだった。ボールが正晴のミットへとグングン吸い込まれていく。

—— ホームベースへと滑りこむランナー、そしてそれをブロックする正晴

土煙が演出する、天然の芸術がそこにはあった。

「アウトオツ——」

主審がそう宣告するのを聞いても、俺はしばらくそこから動くことが出来なかった。

「さすが隆之っ！ナイスバックホームッ！」

「正晴こそ、ナイスブロックだったぜっ！」

ベンチに戻ると、そこにはチームメイトの歓迎を受ける中、お互いのプレーをたたえ合う二人の姿があった。

「二人ともナイスプレー！」

勇樹も二人とそれぞれハイタッチを交わし、すぐにバッターボックスへと向かった。

そんな中俺は、頭の中でさっきのプレーを何度も再生していた。俺の投げた球は相手バッターに完璧に捉えられ、一点取られてもおかしく・・・いや、一点取られなかったことの方が奇跡に近い。

——打球の鋭さ

——隆之の強肩

——そして何より、打球の跳んでくるコースを避けるために、

ランナーがホームまでの最短距離を走れなかったこと

これらのうちのどれか一つでも欠けていたならば、確実に失点していただろう。本当に、運が良かったと言っしかない。

そして同時に、俺の投げる球が相手打線に捉えられ始めていることにも、気付かざるを得なかった。これまではみんなのファインプレーと幸運によって助けられてきたが、今後もしうであるとは限らない。俺は不安になった。

そんな俺の不安を見抜いたかのように、誰かが俺の頭をはたく。

「おいおい、しけた顔してんじゃねえよ。これから俺たちの攻撃だろうが？」

・・・隆之だった。

「いや、別にしけた顔をしてるつもりは——」

「どーせ、打たれた責任でも感じてるんだろ？ そんなもん、俺たちが取り返してやるよっ！」

——まったく、こいつはいつも

「それに、前に直也が言ってたじゃねえか？

『例え試合で失敗しようが、全力でプレーした人間を責める資格は誰にも無い』

ってな」

・・・思い出した。あれは一つ上の先輩達が引退し、俺達がチームの中心となつてから初めての大会のことだった。俺達のチームは県大会の三回戦まで勝ち進んでいた。

乗りに乗っていた俺達だったが、その試合で隆之が、真正面に飛んできた簡単なフライを後ろに逸らしてしまった。結局そのランナーによる失点が決勝点となり、俺達は負けた。

・・・試合後、隆之は泣きに泣いて『俺が悪かった』という謝罪を繰り返した。しかし、俺達は隆之を責めるつもりはなかった。だが、泣いている隆之の相手に言葉を上手く伝える事が出来ない。そんな中、キャプテンである直也が隆之の正面に立って

「お前が全力でプレーしたことはここに居るみんなが分かっている。だから泣くな。」

全力でプレーした人間を笑う資格は誰にも無いんだからな」

と言って、隆之を諭したのだ。

——そうだった。俺には、こんなに素晴らしいチームメイト達がいるじゃないか

そう考え、隆之に礼を言おうとした瞬間、周りで歓声が上がった。

勇樹がセンター前にヒットを放ったのだ。それを確認した隆之が

「じゃあ、俺も行ってくるぜ——続けよ、正晴っ！」

前半は俺に、後半はバッターボックスに立つ正晴に向かって、その声をかけた。そしてネクストバッターズサークルへと歩き去って行く。俺はその後ろ姿に言いようのない頼もしさを感じていた。

続く正晴が打席に入った時、相手の内野陣はバントを警戒しているようだった。

『無理もない・・・うちが先制点を取ったのと同じパターンだからな』

正晴はバントの構えをせずに、初球を見送った。外角に外されたボール球は、そのままミットへと収まる。次の一球、今度は正晴はバントの構えを見せる。相手バッテリーはそれを見ると、サイドとファーストをもう一步前へと出させた。何としても、二塁にランナーを送らせたくないらしい。相手ピッチャーの渾身のストレートが外角へと投げ込まれる——その刹那、勇樹がセカンドベースへと走り出した。相手キャッチャーは勇樹をセカンドでアウトにしようとしただけに送球体制に入った。しかし、そのミットへとボールが収まる前に

——キンッ

正晴のバットがボールを捕らえる。そしてその打球は、前に出ていたファーストの脇を駆け抜け、ライト前へと転がっている。それ

を確認したサードコーチャーのミヤは、一気に勇樹を三塁まで進ませる。ライトから返球が返ってくるが、勇樹がサードベースへ滑り込む方が早い。

『ヒットエンドラン』

一歩間違えれば、せっかくのチャンスをつぶしてしまうかも知れなかった危うい賭け——しかし正晴はそれを成功させ、一気にノーアウト一、三塁のチャンスを生み出した。

打席へと入るのは頼りになる主砲、隆之。これで盛り上がらない方が嘘だ。

「頼むぜ、隆之っ！」

気付けば、自然とその身を前へと突き出していた。

マウンドへと集まっていた相手の内野陣が元のポジション位置へと戻る。隆之は、いつもと変わらぬ自然体……いや、この状況すら楽しんでいる表情で打席へと立っている。その隆之への初球。相手投手の渾身のストレート。しかし、それは高目に外れる。相手ピッチャーも、このピンチに肩に力が入っているらしい。

そして二球目。変化球が低目に行きすぎ、ワンバウンドとなる。

——後ろに逸らせば一点

しかし、ここは相手キャッチャーが体をはって止め、ランナーはどちらも進むことが出来ない。ベンチのみんなながらも、思わずため息が漏れる。そして三球目、これも外角へ外れ、スリーボール。

『やはり、相手ピッチャーの緊張も凄いものらしい』

そう思ったが次のストレートは、内角へズバツと決まった。さすが御代鋤高校のエース、意地を見せる。さらに次の外角へのスライダーを隆之が空振りし、これでカウントはツースリー。一塁ベース上で正晴が屈伸をしている様子が見える。恐らく長打だった場合、一気にホームへと帰ってくるつもりなのだろう。

球場全体がかたずをのんで見つめる中、六球目が投げ込まれた。

低目に絶妙にコントロールされたストレート、その球に思いつきり踏み込む隆之。

——カキンッ

快音を響かせ、打球は左中間へと飛んでいく。

「『『抜けるーっ！！！！』』」

ベンチにいる全員が叫ぶ・・・しかし、ボールは懸命に打球を追ったセンターのグラブへと吸い込まれる。ただ、犠牲フライには十分な飛距離である。勇樹は三塁ベースを蹴り、余裕を持ってホームへと戻ってきた。セカンドベース手前まで進んで様子を見ていた正晴は、センターがボールを捕ったのを確認すると、素早く一塁ベースまで戻って来た。

これで一点を取り、まだワンナウト一塁。ベンチへと戻ってきた勇樹と隆之は、ベンチのみんなとハイタッチを交わしている。

「ナイスラン、勇樹っ！」

「ナイバッチ、隆之！」

「くく、出来ればヒットで出たかったんだがな」

「隆之、さすがにそれは欲張りすぎだよ」

そんな会話に笑顔を投げかけながら、次のシオの打席を見守る。一球目、緊張の糸が切れたのかボールはキャッチャーのミットの上を通過していった。それを確認した正晴は、二塁へと進む。相手キャッチャーが

「ドンマイ、ドンマイッ」

とピッチャーに声をかけているのが見えるが、ピッチャーは肩で息をしており、大分疲労が溜まっているようだ。相手側ブルペンでは、既に二人のピッチャーが準備万端のようだし、もしかしたらピッチャー交代もあるかも知れない。出来れば、今グロッキーになっているこのピッチャーからもう一点取りたいところだ。

そして次の一球、先ほどまでよりもスピードの落ちたストレートがシオのバットに当たる。ふらふらと上がった打球を、セカンドとライトが懸命に追う。

「『落ちろー!』」

俺達の願いが届いたのか、打球はライト前へ落ちる。ライトがボールをしっかりと拾おうとしていると

「バックホームだっ!」

相手チームの誰が叫んだのかは分からない。しかしその声に従ってホームを見た俺は心臓が止まるかと思った。

——正晴が三塁ベースを回り、ホームへ向けて懸命に走っている

ライトは慌ててボールを拾うと、ホームへ向けて強肩をうならせた。

「——セーーフッ！」

・・・本当に微妙なタイミングだった。ライトからの返球が逸れていなければ、アウトだっただろう。まだワンナウトなのだから、無理をする場面ではなかったはずだ。俺はベンチへと戻ってきた正晴に向かって駆け寄りながら尋ねた。

「——何であんな無茶したんだよ？無理する場面じゃないだろ

う?。」

「ああ悪い・・・どうしてもこのピッチャーが動揺してる間にも
う一点取りたかったんでな、つい体が動いちゃった」

どうやら、俺と同じことを考えていたらしい。しかし、それを無
茶してでも何とかしようとするのが、正晴らしいというか何というか

「だが、効果はあったみたいだぜ

——見るよ、ピッチャー交代だ」

正晴の声に従ってグラウンドを見やると、相手の二番手ピッチャ
ー（左のサイドスロー）がマウンドへと上がるところだった。

『相手のエースを引きずり下ろした』

それは俺達のベンチの中で、確かな興奮となって駆け巡った。

——しかし二番手ピッチャーとは言え、相手は他の高校ならば
十分にエースと呼ばれる実力の持ち主であった。六番のコバは内角
へのストレートに詰まらされたショートゴロ、それをショートの高
木が軽快にさばいてダブルプレーとなり、六回の裏のうちの攻撃は

終了した。

そして七回の表のマウンドへと上がろうとした俺も下へ、監督から無情な命令が下された。

「正樹、ピッチャー交代だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6080k/>

あの一球

2010年10月11日12時32分発行